ば彼のセンスは疑はるべきであるが

つてゐない、これが都會の眞中なら のだ。他人との交渉は彼の意識に上 そして山に誘はれて歌ひ出してゐる てゐるのでもない。全く日光に風に

の一景であるかの様に人に微笑を與 此處山に於てはそれさへ自然の戯れ

美しい聲はでない。調子も外れてゐ を張り上げて歌ふのを聞く、 てゐるのが何時の間にか高らかに聲 出た時に、始めは低く呟く様に歌つ 線の遠いと思はれる者が高原へでも

どうも

供し本人は誰に聞かせやうとし



會 缶 本 Ш 日

43

月 + 和 年 昭

行くと私達の心を自然に歌ひ

へるだらう。

Ш

て

5

た

5

歌

早

III

蘢

郎

は大きい。 ととを心得た人であつてみれば喜び 歌つてゐるに違ひないと思ふ。 砂 ぬ人にしても山では心で何かの歌を といふやうな形容を用ひずとも宴に かない。聲に出して歌ふことをせ 一つに歌ふことを数へこまぬ器に 竪琴の絲が吹く風に誘はれて 少くとも山へ行く愉悦

然の懐に於てのみである。

それも奥

**兼ねから離れて自由に歌へるのは自** 距てるに至った私達が全く周圍の気

であり森に囀る小鳥であればよい。 のために自分が歌へばい」のだ。私 は問題にされない筈だ。それは自 こと」は遠ひ壁の美醜や唱法の巧拙 たところで、それはステーヂの上 は林に鳴く蝉であり、草に歌ふ蟲 私がこ」で山に於ける歌を讃美し 分

中で歌ひ废いのである。

懸けずに済む。事實私達も靜けさの 静けさを好む人にも氣の毒な思ひを が顔を出す、又人が居なければ山 聞いてゐると思へば愍じひの飾り氣 深く人の氣配の少い處程よい。人が

つき肺臓もいふことをきく。 行く時又は森林を歩く時が心持も落 道も歌が踊つて駄目だ。矢張高原を ないかと思ふと美しい。劇しい降り もヨードラーを響かせてゐるのでは イスあたりのガイドならこんな時に け は私達の肺臓や心臓はとても歌ふだ の餘裕を與へてはくれない。 で歌ふといつても劇しい登りに

吾々の山友達の中の音樂とは凡そ

高こそは一番にこうした情景に相應 私の好みからは各國の民俗が有つ民 30 のアリアもこ」では作為が稍氣にな るものだ。嘗てから心にあるオペラ し出來るならそこの情景に相應しい べき譯のものではないのであるが併 5 のであればその旅の想ひは深くな か。 ではどんな歌が山で歌はれるだら それこそ個人の趣味に立入る 14 歌ふ氣持は起らない。

らいつて學生々活から餘程の距離を 日本の現在の生活や家屋の構造 てもさ程必然性を害はれない。 易さで人の心に訴へる。 匠の彫琢をこそ受けてはゐないが、 はしく心を惹かれるものだ。

意味からさうしたものを强ひて山で 思ふが、さらかといつて國粹保存の 誘の数々がこらいふ過程を辿つて姿 を消して終ふのではないかと心細く なのだらうか。私は日本の美しい民 の本來の姿で見るよりも餘りに洒席 つのはどうした譯であらうか。俚謠 の伴奏として眺め過ぎて終つたせ 持にそぐはないで滑稽な感じが先だ 等々にして、 木曾節にしても、小原節、 の伴侶に談つてみやうと思つても何 か外國の歌で」もあるかの様に難し 性の美しさに溢れてゐながらいざ旅 ことである。馬子の歌ふ追分など野 よることであり簡単にはいへない。 らうか。こういふことは人の好みに 伴侶になるものが少いのは残念な 本の所謂俚謠にはこういつた場合 何處の國の民謠が一番心を惹くだ 純粹に吾々の民謠でありながら 大きく歌つて見ると心 おけさ節

歌つても倦きない、たゞ山岳人の間 北歐のものに愛着を覺える。それら 摑むことさへ大きな仕事ではあるが 特徴に溢れた健康的なものは幾度 い南歐のものよりも男性味の多い 世界にあり剩る程の民謠の機略 への聯想に關する限り矢張甘味

歌だから直ちにつまらぬものとはい

**助節から溢れ出る素朴さ、親しさ安** 渉を經て來たものでリードの樣に互 い間民俗の心に栽はれ自然との交 伴奏を離 それは n

川や湖や山や森や町の名などが大變 旋律が高雅でリズムが明快 に多く歌ひ込まれてゐる。その代表 と歌はれてよいものだらうと思ふ。 親しみを與へる事などから觀てもつ 歌曲が有する五音々階が日本人には ても骨子が英語であることゝ佝その つことゝ同地方の俗語を交へてはゐ 國中部の山岳、 スコットランドの歌はその風景が 其歌詞には吾々の耳にも親しい 湖沼への相似を有 である

流行歌的のもので溢れてゐる。 書き废いと思ふ。 も餘りに多く小唄式のものが歌はれ 的なもは誰も知るロツホ・ローモン その言葉といふ障壁にぶつかる。 を有つてゐるが、歌はふとするに に峡灣の上に擴がつた牧場や雪を戴 いた嶺を身に傳へられるやらな曲 しい牧歌風のものを撰んだ方がよい ならヨードラー以外の單純にして美 て歌へるのだといふ。スウイスの歌 あれはスウイスの様な高燥な土地に 育つた健康な肺を有つものにして始 れる裏聲を用ふる技巧に至つては一 ある上にあの一種不思議にさへ思は 寸眞似て見るのさへ出來ないことだ スウイスに特殊な發達をしたもので 人には歌ふべく苦手である。 の常識であるヨードラー の「美はしき岸邊にて」であらう。 最後に私は山で耳にする歌に就て 音樂にも澤山取入れられてある様 ノールウェーあたりのはグリーク 常に廣い音域を要し音程の飛躍が 山でもスキー場で は 般の素

かな られると思ふ。 惡 流行歌だともいへやらが、せめて山 を詮議する前に次の様なことが考へ いと思ふ。それは必ずしも歌ふ人が へ來た時だけでももつと心を山の方 結びつける様な歌が歌はれるとよ 今日、日本に於る音樂晋及の情況 い譯ではないが、先づ流行の可否 いし、 又山の奥まで傳はるから

### ス \* 1 術 0 解説に 就 7 0 疑 問

大 村 郡 次 郎

讃んで、 問百出。遂には初心者がスキー書を のまゝ殘される所が多く、更に新し わかつて來る點もあるが、依然疑問 尠くない。で他の著書を讀む。幾分 **づ書物で豫備知識を仕入れようとし** 皮肉ではあるまい。 と云はれるのに、まさか之に對する したに違ひない、と考へるやらにさ 持主か、或は極めて粗末な讀み方を としたら、其人は餘程優れた頭腦の ららが、一通りでも分つたと思つた た。處が讀んで見ると不称・疑問が キーは極めて初步である。だから先 なつた。机上スキー家になる勿れ ば讀む程、精讀すればする程、 疑問さへ湧く。からして數多く讀 最初に御斷りして置くが、 勿論完全にとは行かないだ 私はス 疑

てそれ等に對して私が多少の疑問乃 ていゝ、入門書は、熟達者のためで の避け難い缺陷以外に、相當不備が伴ふ。併し一般のスキー書には、こ 至は希望を述べることは宥して貰へ なく、初心者のためであらら。從つ されたスキー書の殆ど全部とも云つ あるのではあるまいか。我邦で出版 解しようとするには、多くの困難 葉を以て説明し、又それによつて 元來スキー動作のやうなものを が

つて今日の時期が大變好い機會だと をつけるのはいろくな意味からい

はれる

を斜面に平行に保つことと水

てな

いものが最も多い。

中には内角

を説き、 が 1

荷重以後の事は何とも書い

(外スキーの後尾を開く時の平路 を平踏に保てと書いたものがある

否スキー

外スキーに體重を移した時、

其スキ

(ベンド) である。

歌曲に親切な美しい譯歌の附された

あつて欲しい。この仕事に手

そ

れには手廣い範圍から渉獵された

編纂をして貰へないものだららか。 通り一つ立派な「山でらたふ歌」の 於て日本山岳會では外國で例のある 熾烈になつてゐる。こらいふ時期に ともあるが極めて場當り的の價値の **ふ銘を打つた歌曲集を市井に見ると** 

いものだ。現在では要求は可なり

人々の求めてゐる様な音樂の集成が

それから、

もち一つには山へ行く

の勢力を揮ふのだとも考へられる

水に無いことである。

稀にさらい

3

勢ひ耳から入り易い流行歌が絕

覺えとむことの方は難事に屬してゐ

8

る種類の小さな樂曲を探し求めて

味到することは出來ても自分の水

狀態にある。

交響曲に傾到し室内學

ふことになると大變に困難を感ずる

る

のに正確に譜を讀み降に出して歌

非常に缺けてゐる頭が進み過ぎてゐ に反し實際に演唱する方面の訓練が では鑑賞方面に於て著しく進である

ではないだららか。例へば「平路」で 得まい、併し一つの著書の中では、 30 するのと斜面に平行を平踏とするも は「斜面で平踏すれば、必然的にス たのを flat としてあるが、本文中に ある。某書を見ると挿圖にはスキ する語は統一と意味の明確さが必要 少くも屢々併用され相當重要性 用語が統一されて居ないのは止むを のとが約半々である。處がその何れ (左右方向) が斜面に平行に置かれ 他の著書を見ると、水平を平踏と 機どつちが本常なのであらう。 は角付を行ふ」と書いてある。 一は川語の不統一と不明確で

あるかを示すものではなからうか。 行である。緩斜面では餘り問題とな も一つは水平であり一つは斜面に平 がら其内容を異にして居ると云ふと 要はあるまい。祭しく平踏を說きな 差違が出來る筈である。どちらでも らないだららが、急斜面では相當の が説かれて居る。等しく平踏と云ふ の説明を見ると一様に「平路」の必要 い」のなら平踏をそれ程重視する必 は、クリスチャニアの、 般の現在の解説が如何に曖昧で

發詳後日の淺い我がスキー界で を有 あ ない。

の著者に於ても、クリスチャニア等 説明が詳しければ詳しい程、 眛なものが少くない。 多の混同が残され、從つて解説の曖 此區別が指摘してあるのは卓見であ と心理的説明の混同である、某書に 同である。換言すれば、物理的說明 解を生ずる惧れさへある。 る者には得心が行かないし、 のも、何故にかくすればかくなるの 付く。と云つて理論的説明を缺くも 理解は困難となり、こぢつけ が留意されてないものでは、 るが遺憾ながら其書自身にも尚ほ幾 かが疑問となり、相當理性を有す 第二は理論と練習上の心得との混 又何故にかくすることが必要な 況して此區別

例として制動廻轉を擧げよう。 反つて 理論的 が日 且つ誤 右

3

論じて「各スキーの右半に體重をよ を與へる力の一つとしての同一スキ 上に於ける横方向の不均等荷重を 某書を見ると、スキーに廻轉運動

平に保つこととは異った事柄であり すればスキーの川語の大部分につい はさるべきではあるまいか。 必要なのだから、全然別な言葉で表 而も共にスキー する。概念の明確を期するために し解説の曖昧は用語の不明確を甘容 て同様のことが云ひ得られる。 は、先づ用語の明確に努めねばなら の不明確はスキー術の解説を曖昧に 右はほんの一例に過ぎない。 術の正確な解説には 用語 極言 廻轉である。そして舵作用廻轉に 動廻轉の後半は大部分舵作用による 付すると明記したものもあるが)制 ふに過ぎないのではあるまいか。 平踏する氣持でやつた方がよいと云 を妨げるから(他にも理由はあるが) は自ら内角付されるのが、自然であ たドスキーを制動型に開いた場合に 角付を必要とする 之は後で述べる)

3

迷はせはしないだららか。

せと云ふだけでは、讀者を(少くも 或は平踏で開いたスキーに體重を移 し無條件にたゞ平踏に保てと云ひ、

過度の角付は反つて廻轉の圓滑 それによつて廻轉するのである

理論的にも、理解しようとする讀

者

而も力弱い舵作用に頼らないでも、 作用はコールフイールドの説いた如 て舵作用を述べよう。從來の所謂舵 うに思へるが、その著しい一例とし 簡單に强力に作用する、文字通りの が、その質スキーにはか」る複雑な く兩スキーの關係に基く作用であ の理論付けにはかなり缺陷があるや するのではあるまいか。スキー技術 るが、より以上理論の不明確に原因 。それは何か。スキー先端部の反「舵」がそれ自身の構造に備つて居 葉の不充分等に由來するものもあ の如き混同は説明上の不注意、 **耐スキーの關係によるよりもより多** 

荷重されたスキーの角付

(即ちべ

中はやはり主として舵作用のやらに

事を附加

併せて不遜をお詫びし

れたものと信じて引用したのである

0

を擧げてないが、それ等は類書中優

最後に、文中に引用した著書は

私は本説とする。

最近唱道される無制動廻轉も、

0

作用の理で歳きはしまいか。

叉

なほシェーレンボーゲンは殆ど

の傾き)

によるのである。

へる。

かく見て來れば、

このべ

T

おくっ

角付しないとは、 は然しどく小さな力で、之のみを以 私には分らないが、今は觸れないで スキー術である限り何を意味するか り多くかける時は、 してゐる。若しスキーが眞直ぐな板 てターンを行ふことは先づ無い」と おくー を受けること多きため角付けなしに (右半に體重をより多くかけて而も 筆者)右に廻轉し得る。之 雪の上で行はれる 其部が雪の 抵抗

ても角付で廻轉し得るではない アの後半期に於て身體の内傾が説か 方にあるから、此解説に從へば鋏形 内スキーはより早く週轉して雨スキ 可 後期を除く)。その爲めには踝を殊更 れ、同時に平踏が要求されて居る(最 内スキーの廻轉軸は前傾によつて前 あらうか)。また前傾と内傾とにより に曲げねばならぬが、果してそれが は鋏形をなすとも書いてあるが、 能であり、現實になされて居るで 又殆ど全部の著書にクリスチャニ

よつて外方に投出されるのを妨ぐと するのである。そして内傾は隋力に 及び舵作用(ベンドの)に漸次移行 弱まり、ヘルウンターシュラウベン はあるが、 ら)スキーに身體のひねり及び滑走 チャニアは拔重された(特に後尾 T による舵作用を導入することによつ たい内傾は過度の角付を來し易いた 共に、舵作用を强めるのであるが、

明

白には説かれて居ない)

が、私の見た限りの書物には少くも

旣

から觀過されて居るのだらう。へ或は な事柄が、どうしてスキー術の解説 の「舵」でもあるのだ。この簡單明瞭 の構造であるばかりでなく、スキー いらないための、又無限軌道として 端部のベンドはスキーが雪に突きさ 先端に取付けたのと同様である。 キーは右に廻轉する。恰も船の舵を

に誰かゞ云つてるのかも知らない

て來はしまいか。即ち之等の廻轉は よる廻轉も、自らその解説が異つ ・テレマーク等從來の所謂舵作用 常に認識するならば、全制動・制 記のスキーの構造による舵作用

> な例を云へば、片スキー となる代りに後尾が交又しなければ のみによつ

**消力を働かせて廻轉するのが主で** 訂正されはしまいか。即ちクリス の如き不合理も、 荷重と共に之等の作用は スキー ・の構造

抗を斜め左から受け、之によつてス

とベンドも右方に傾くために雪の抵 中のスキーを右に傾けたとするする

ならない筈である。

には先端部のベンドがある。

今滑走

切れに近いものであつたら正にその

通りであらう。併し幸にしてスキー

混同してはならない。) るのである。(ことでも理論と感覺を めに、平踏の氣持で程よい角付とな

れるのではあるまいか。 ŀ. (若し之が眞實であるならば 術の解説に多くの訂正がなし得 の舵作用の認識のみによつても、 、スキ

之も止むを得まい。たどそれ等の 學説に反對說のあることを思へば、 迷はしめるが、スキー技術は元來無 さへ尠くなく、初心者をして歸越に 全然反對のことが説かれて居るも 同一技術に就ても異説はもとより、 ても納得し得ないやうなこぢつけが に氣付かれるやうな誤謬や、 には少しく理論的に考察すれば直ち 数に存し得るものであり、大部分の 上は私の疑問の一端に過ぎな ・何とし

50 るならば、 論付けられた新しい解説が建設され 現在のスキー理論が如何に下らない 1る人達の真摯な再検討によつて、 に於ても卓越した人が尠くない。 では技術に於ても理論的考察の素質 易くすることは否めない。幸に現今 屢々輕視或は排斥されて居るに拘ら 理 のであるかど明にされ、正確に理 正しい理論が解説をより理解し 若しそれによつて私の疑問が謂 論はスキー術の指導者によつて 我々初心者の喜びとなら z)×

### ブロ に答ふ " ケ > 0 怪

九三

相當に存して居るのは事實である。 た皮肉も 0 前 5 て自分の眼利きを吹聴に及ぶのは何 るが真物をイミテーション扱ひにし て噴慨するのは子供らしい愛嫡もあ :號の會報で書かれた「プロッケン かと思ふ。-- 浦松佐美太郎氏が 怪」を讃んだ私としては、さらし 銀座の夜店でイカモノを摑まされ 云はないで措かれない気が

れなきものであることが明にされて る程、 めたヤングの「頂上にて」の譯章は しを强いてイカモノ扱ひにする、 氏は謂はゆる若書き、ないしは書卸 る事に相違はない。にも拘らず、浦松 合もある。しかし双方とも真物であ い場合があり、またこれと反對の場 る場合と、書卸しより改作の方が良 もちろん人により若書きが優れて 人の作を區別するのに用ひられる。 る。共に時代を腐てゝ書かれた同一 文藝作品に「書卸し」といふのがあ 書畫に「岩書き」といふのがあり 私が『峰・峠・氷河』にをさ 「イングリッシュメンイン・

る

ts

たのが、筆の勢ひか、性格の勢ひか

惑を及ぼして終つた。しかも最後に ど禍ひして、ヤングにまで飛んだ迷

そして

直ちに「嘘を吐く」は片腹痛い。 原因があるにしても、 それを以て

扱ひだ。「今書く文章は良いが、以前 拘らず、浦松氏はそれがあると毀辯 があるにしても、もとくヤング どとく、ヤングその人の眞質を沒す はした「オン・ハイ・ヒルス」からの 際して苦心した、鏤彫の跡を注 くこの短文で表現しようとしたとこ てゐるのか解つたものでない。 様だ。賞められてゐるのかけなさ のものはなつてゐないといふのも されるとよいと思ふ」と。 する。そして云ふ「若し右の二書を る程の差異があらう筈はない。 のである以上、作者の價値を左 の人が同一の山登りの事を書いたも るやらな箇處が見出されるだらら の文章との間に、果して氏の云ふが 譯と、私が譯したランの編著中から よ」との意味を布衍するつもりだつ ろは「ヤングが單行本にまとめるに て來ると、ヤングはまるで半分子供 の文章を如何に書くべきかの参考と お持ちの方は、兩者を比較されて山 はゆる「書卸し」と「改訂」との差 しかも、わざん、浦松氏をわづら かうなつ にも [11] n 3

中のものと一字一句を克明に對照し ザ・アルプス」に収録された、謂は なかつたととに手浴ちがあり、 念が足らず、「オン・ハイ・ヒルス」 同一課題の「書卸し」だった。 只私 何時も最高の頂上を求めるスポーツ 何處まで鼻つ柱が強いのだらう。 身に必要なお説教まで垂れてゐる。 マンであつて然しい」と敢て自分自 「山岳人は正直で、明朗で、 いつた ヤングの「オン・ハイ・

浦松氏に一つ註文がある。それは私

の別著『雪線散步』中に収めた「詩

がない。

しかし私としては、

この際

説を附して一册の本に纒めた。そし たからだ。 ランの編著のやらなのが格好であつ て讀者のためにと思つて苦心した解 に鰥したものが積り積つたので、 た。偖て、さらいふ風にして片手間 または事務机の傍で擴げるのには、 譯さらとする者にとつて、 務にたづさはつてゐる傍、 あり、かつ私のやらに日々多忙な用 らな部厚な本を持ち廻るのは不便で が、機會を得てそれに取りからつた としたのはずつと後の事ではあった 以前だつた。もちろんそれを譯さう 著中あの一文に接したのはそれより 8 一つには「オン・ハイ・ヒルス」のや ので、一方、私が初めてランの編 は一九二七年に初版が出た そして何時かそれを譯し 電車の中 暇を見て

> 手つ取り早い筈であり、 だけ解つてゐることを示すのが最も **ゐないといふ證據には、自分は是れ** 非披露して貰ひたい。他人が解つて と同時に氏のヤング觀なるものを是 な」批評と感想とを聞かせて欲しい して、氏のいはゆる「正直で、明朗 人・登山家としてのヤング」を一讀 い作法でもある。 それが男ら

### 問 題 の 說

佐美太郎

られた。私としては別に前文に對し てゐられるので、その觀解を指摘し 藤木氏が、私の文章を全然讀み違へ 言葉を足す必要もないのであるが、 右の回答文を私に示され意見を求め 寄せられたとのことで、 文に對し、藤木九三氏から回答文が 心が、前 號の會報誌上に載せた 編輯者より

說

の本旨には何等關係のない、些つ

ない所へ論鋒を進め、あらぬことを が悪いといふ點である。ヤングの一 示すに際し、藤木氏の採られた態度 あり、その二は、飜譯原文の出所を 故しくひどいものであるといふ點で 河」に載せられた藤木氏の飜譯が、 させて置から。その一は、「峰・峠・氷 問題とした二の點を、先づはつきり 議論してゐられる。私の批評に於て ない誤解から出發して、思ひもかけ 一、藤木氏の回答文は、飛んでも

賣りのやらな批評はご免を蒙ると云

頭から他人の人格を傷けんが

もちろん私は、同情や好意の押し

岳界のため」だとは考へない。 為にするやうな筆を弄する事が、「

も他人様からさら見えるなら致し方

らである。

從つて私の批評は、

ヤン

當て篏る最もいる一例だと考へたか

文を引用したのは、此の二の批評に

のは明かだ」は恐れ入るが、それ

また「ヤングが少しも解つてゐな

で濟んだ筈だ。

プロツケンの化物に咬み付かれない

もので押し通しておけば、からした 老婆心など振り切り、單にヤングの れぬしかしあの際、强ひてくだらぬ これも私の不徳の致すところかも知 直」呼ばはりされる結果となつた。 とした私の不注意が禍ひして、「不正

玆に述べさしていたどく。 今一度藤木氏の爲めに問題の解説を

> でもない。私の批評の對象となつた グの文章をイカモノと云つたのでも 誤解がある。 然了解していたゞき度い點である。 ける著者の責任を問ふてゐるのであ ものは、「峰・峠・氷河」といふ一册の なければ、藤木氏を非難してゐるの 藤木氏の回答文は、此の點に就ても る。之は不の批評の常識であり、 本であり、その本の關する範圍に於 當

物で、 ある。 との區別を私が問題にし、改作が真 べきであると云ふのである。 飜譯も其處に明示された原文に據る から拔萃したと斷つた以上は、その 私が問題としたのは、原文の出所で そんなことを毛頭議論してゐない。 様に變な解釋をされてゐるが、私は 二、藤木氏は「書卸し」と「改作」 前書きで「オン・ハイ・ヒルス」 書卸しが低物だと云つたかの ある。

30 ひにしたなぞとは驚くべき曲解で がら、さらでない所の文章を載せらを重ねた所の文章を譯したと云ひな か惡いかなぞといふ價値判斷をして指したのである。何れの文章が良い その態度を考へること」、一の事を を注意こそしたれ、ヤングを子供扱 ヤングの苦心に敬意を拂ふべきこと ゐるのではない。ヤングが苦心推敲 云ひ現はすのにも言葉の選び方に色 册の本を作る場合に、ヤングが一字 なると云つたのは、舊稿を集めて一 べることが、山の文章を書く参考に るものであると云つたのであつて、 れたのでは、ヤングの苦心を無にす 々の方法のあることを考へることを 一句を書き改める迄の苦心を拂つた 私が、ヤングの二の文章を讀 あ

られるが之も誤解である。「オン・ハ ルス」からの課文のやらに考へてゐ た拙譯を、藤木氏は「オン・ハイ・ヒ 私が、 藤木氏の譯文と並べて載せ

明にする爲めであつた。私は之によ くひどいものであると批評したかを 拙譯を載せた理由は、如何なる根據 中の一文に基いたものである。右の の據られた原文、即ちランの編者の れる筈である。私の譯文は、藤木氏 分を讀まれたのなら、直ぐ氣が付か で、私が「峰・峠・氷河」の飜譯を甚し イ・ヒルス」の右の箇所に相當する部 つて第三者の批判を仰いでゐるの

られる。 所が殆ど了解されてゐないであらう 何は別個の問題である。私の論旨は 峠・氷河」一卷であつて、ヤング觀如 られる。私の批評の範圍は飽く迄「峰 氷河」中の他のものに就ても云ひ と云ふのである。此の事は「峰・峠・ 察すれば、藤木氏にはヤングの云ふ 簡單である。あの飜譯の程度から推 觀を問題にしたかの如く誤解してゐ 义、藤木氏は、私が同氏のヤング 得

・峠・氷河」の飜譯原文の出所の間

四、私が批評した第二の點は、「

しく繰返して置から。 題とした點を、誤解のない様少し詳 答へ得たと思ふので、次に、私の問 以上で藤木氏の回答文中の誤解に

ど過ぎる飜譯の仕方であつたからで と稱するにはその間違ひが餘りにひ どい飜譯でも、それが全卷の中で數 交を引用したのである。 ある。その一例として、ヤングの一 た理由は、「峰・峠・氷河」が單に誤譯 ケ所にしかないと云ふならば、わざ り出して問題としない。又甚しくひ 云へる程度のものならば、强いて取 峠・氷河」の飜譯である。單に誤譯と く 批評しもしない。私が問題とし 三、私が問題とした一の點

が誤りなく傳へられてゐるかどらか 藤木氏の譯文によつて、原文の意味 之が私の批評した點である。 へるのが、その第一の目的である。 飜譯は、原文の意味を間違 なく は「峰 評の點であった。 に、「峰・峠・氷河」は拔萃集として 當然問題となるべきものではある 果して珠玉であるかどうか。之等も が、之等の點が問題となつて來る前 一の問題を提起してゐる之が私の

を 拔萃集の目的は、幾十幾百の書物 讀み得ない人達に、之等を讀破し

7 ・峠・氷河」の飜譯を批評したのは、 に資する爲めの飜譯とあれば、倘更 如何に考へてゐるかを、我々の參考 ばならない。海外の登山家思想家が に對する責任を感じ、慎重でなけ の飜譯は正確でなくてはいけない られやら筈がない。科學や文學の本 以上の立場からである。 氣を付けるべきであらう。私が「峰 はあり得ないと思ふ。飜譯者は讀 山の本の飜譯は何でもいゝといふ事 してゐたのでは、原文の意味が傳 文法を無視し、言葉の意味を勝手に れ

く評價さるべきものである。 力並にその適不適によって一層大き 海外文献の拔萃に對する編暴者の 種々異つたものが作られやう。 從つてこの本の價値は、飜譯よりも と同時に海外文獻の拔萃集である。 題である。此の本は、飜譯書である 拔萃集は、編纂者の方針によつて 劳

河」はアルプスに關する古今の珠玉多の編纂方針があらう。「峰・峠・氷章のみを集めても出來やう。 其他機 拔萃せられた古今の珠玉の文字が、 列の理由は知る由もない。更に又、 が示されてゐない。從つて內容の その内容に關しては別段の編纂方針 の文字を集めたといふだけであつて 出來やう。又、山に關する珠玉の文 を残した人々の風貌の一端を知らし 文献に就て云へば、登山史上に功績 める為めに歴史的に集めた投萃集も 山の 纂者の苦心になる拔萃集からの借用

つて編纂の功績も認められるのであるのであり、その努力の大きさによ ばこそである。 中に出されるのも、此の勞作があれ る投萃集が編纂者の名によつて世の ある。從つて編纂者の努力も非常な 0 選んで、少くともその最も優れたも 得た人が、その中から珠玉の文章を のであり、その努力の大きさによ だけでも知らしめやらとする所に

萃した章句は、あらゆる種類の文獻作中から選んだ。引用し、または拔 選擇すべく志した」と記されてゐる と題目にわたり、なるべく廣範閣に 獨、墺、伊、瑞、米など各國著、周氏は序文で「古今を通じ、英、 登山家を始め、文學者、詩人、科學 なる拔萃集として出版されてゐる。 「峰・峠・氷河」は藤木氏の網纂に 即ち編纂者として、如何なる範圍 哲學者など、四十二名家の代表 米など各國著名な

頁の書籍の中から、僅か一頁位の珠就て一册宛讀むとしても、その數百 は直ちに想像される。一人の作家に を見ても、並大抵の勞作でないこと ある。藤木氏の序文に記されたどけ 對する功績を、世に問ふべき基準で る。之は編纂者が、自己の拔萃集に れたかを此處に示されてゐるのであ 拔萃に當つては如何なる勞作を致さ に於て古今の文獻を涉獵せられ、又

中に收められた多くの文章は、藤木 非常に大きなものとならう。 は、之をこのま」に受け容れ」ば、 の拔萃によるものでなく、 で以てしても、「峰・峠・氷河」の 俳し、不幸なことに私の貧しい知 峠・氷河」の拔萃集としての評 他の編

な勞力であるに違ない。從つて、「峰 るとなれば、讀むことだけでも非常 人の作家に就て、二册三册と讀破す 常に難しい仕事であらら。まして一 玉の文字を選び出すといふことは非

> ふもの間違である。 ルプスを舞臺とした小説であるとい が、之も孫引の際の間違であらう。 ・キャリャー」から選ばれたといふ の拔萃がそれである。「ビーチャムス を舉げれば、一五九頁のメレデイス 引用したのである。又若し、他に例 う。ヤングの一文は、その一例として れば、不正直と云つても差支なから 自分の仕事の如く書かれてあるとす て置かれながら、その抜萃の仕事を をしたのであつて、之を借用係引し 「ビーチャムス・キャリャー」がア 實は、他人が拔萃といふ因難な仕 と見るのは當然であらう。然るに事 原書に就て、 に記されてゐる。之では、藤木氏が 何年版の何章から拔萃したといふ風 の前書きには、原書の名前を示され 及されてゐない。そして之等の拔萃 ジ・アルプス」に就ては、少しも言 ランの「イングリッシュメン・イン・ てゐない。殊に一番多く借用された その他の場合には、少しも明記され ら借用せられた旨を斷られてゐるが つか四つの場合には、他の拔萃集か で あることが明である。 拔萃の勞作を致された 藤木氏は三 事

と思ふ。 本が世に出された以上、著者は其處るべきものでないと思ふ。又一册の 以てその責任を回避すべきではない ふべきであつて、書かざりし事由を に書かれたことに對して全責任を負 乃至は携帯の便宜によつて決定され 分に屬すべきものかは、本の大きさ 拔萃巣編纂といふ一の勞作に對する 功績が、他人に屬すべきものか、自 の便宜の爲めとか云はれてゐるが、 藤木氏は回答文の中で、 電車の中

まれんことを切望して止まない。 前號會報誌上の私の批評を冷靜に讀たと思ふ。最后に、藤木氏に今一度 以上で私の批評の論站を詳にし得

しい穩健派の主張を根底から

覆

佐よりの勧告により、

雪嶺山脈登攀

コントルヴアーシアルな場合は問 行き废いと考へて居ます。問題が 大小に拘らず倉報紙上で取扱つて れども、今後も日本山岳界の問題 前號所載「ブロッケンの怪」は會報 としては新しい試みでありますけ

ます。此の點充分御了承の上旺ん 題は飽く迄卒直に然し別らかに且員共同の機闘でありますから、問 つ建設的に取扱ひ度いと念じて居 反駁乃至回答も同じく。會報は會 は取上げない心算りであります。 等の建設的意義もないやうな論點 者か負ひます。編輯者としては何 んが、原稿の取捨は勿論會報編輯 の種原稿のみの問題ではありませ の慣習に則るわけであります。此します。つまり通常の筆戦の場合 し問題提起者の回答を添えて發表 論之を掲載します。そして之に對 しての立場からの寄稿があっぱ勿 題の提起に對しデイフェンダーと 0 である。 を舉げ様う。 主張點は何にか

に寄稿あらんことを希望します。 (會報編輯係)

## クレツテライの新 可 能

丸 岡

誠

幸

1 Ø 實践され得るであらう。兹に謂ふ所 のみ「クレツテライの新可能性」が 的な天才クライマーの出現に依つて を企及するに至つた今日、最早急進 3 岩登にしろスノークラ フト に 「新可能性」こそは在來のリスロ パット・スティデイル流な生優 盆々アクロバテイクな高等技術 L

> つて持來たさせられる新可能性なの ca ism であり、更に一層 Acrobatism なものであり、又他面頗る Ra-」。其は在來より一歩進んで Padi-1の將來に吹込むものと云ってい ionalism に立脚せる高等技術に據 脈々たる新生命を若きクライマ

るヒントとして、面白い箕例として クレッテライの重點を置く事であり 事に囚つて VIS INE RTIAE に テライを意義づけるものなのだ。 種の Inertia speed にょつてクレ この新可能性を手早く了解せしめ 然らば「クレッテライの新可能性 な 高速度を絶えず持續せしめる ある巨大な杉樹の巨幹を攀づる 其は特にリズミ

る事が可能である。(この場合、 の幹面をグリップ、クライミングす 込む事に據つて何等の手懸なき垂直 頭上に相互に尺餘の間隔を以つて打 把握して梗めて急進的にピックを 彼は双手にピッケル(或は手鉤類) 双脚

返 破壊して了ふ故、 することはリズミカルな Inertia を 持する許かりて無く、クレッテライ 迄持續されねばならぬ。 つて、最初のアンカレーヂたる杉枝 ズミカルな Inertia hgih speed を以 然もピックの打込は極めて速かにり は全然使用されず垂れた儘である) 可能ならしめる。勿論途中で停滯 とのヒントは、 三分の打込で然も全體重を支 絕對禁物である。 垂直に近 ピックは僅 い氷壁の

於ても質に Rythmical inertia この新可能性は在來の岩登術の上 借らずに登攀の新可能性を見出す。 相互に氷壁に打込む事に因つて、局 Balancimg として出現するであら 部的にスユタイグ、アイゼンの力を 登攀に迄應用される。 双手の氷斧を

ないと思ふ。―一九三四一八ー一 力學的にもとつと重視されねばなら パランスやリズムと共に Inertia ライする事が可能である。 合 不可能に近い岩壁をすら、 く故に極めて急進的に双手双脚をス あらう。 ムースに使用する事によつて、一見 を築上げるかは云々する迄もないで 在來のスローモーションの穩健派に 比して、如何に如實に素晴しい業蹟 自由に驅使する天才的クライマーが 斯くて我國岩登の將來に於ても、 理性によつて、猿の如くクレッテ 乃ち極めてスムースな Inertia を Inertia speed に重點を置 力學的 かい

## 黑 田 IE. 夫

冬期雪嶺山脈

登攀報

告

Ļ せし處、危險中止の報を得たり。 佐田邊孝太郎氏に白頭山登攀に 以前馬術を数はりし羅南騎兵聯終少 少に追はれて、朝鮮北部に限をつけ 昭和九年末、 京大白頭山登攀を開き、 馬賊の狀態に關し、 中部地方の降雪量僅 問合せを 川邊少 時 發

二十八日夜東京出發せり。 の返電を受け、出發に決定、 問合せを發せし處「是非來い、 に變更せり。 更に積雪狀態に關し、 十二月 待つし

行、須賀太郎、嵯峨根遼吉、

黑

夜を安眠す。

二日明

と同様に準備し、 ツトとせり。防寒具は前年の北海道 朝、 備せず、食料は全部東京にて用意。 田初子及筆者の四人なり、野營の準 次の如し。 山鶴觜、 夕は味噌汁に米飯、晝はピスケ 輪標を携帯せり。 スキー以外に金 行動

三十一日午前七時羅南着、 三十日午後京城通過 二十九日夜朝鮮海峽渡過 十二月二十八日午後十一時東京發 朝鮮山岳會齋藤龍本氏等の出迎 川邊少

乞ひ、 佐、 問ひ、雪嶺山脈登攀に關する相談を 受け、午後、田邊少佐の案内にて、 兵平川義人軍曹の白頭山 登 攀の 説 を受け、田邊少佐宅に迎へらる。 須賀、黒田兩人、朱乙に淺野勇氏を 明、齋藤氏の雪嶺山脈概況の説明を 田邊少佐宅にて、 朝鮮人夫四名(內、 前茂山駐在の憲 一名通譯

迎年せり。 同夜は田邊少佐御一家の歡迎裏に

**輸用)の周施を依頼せり。** 

出發、同十時朱乙通過、十一時頃、 昭和十年一月一日 午前九時、自動車にて田邊少佐宅

に出づ。

三日、暗風

3.0 來着を待ち、午後一時三十分、人夫 城町着。同所、駐在所にて、人夫の に荷を分擔、二時出發。甫上洞に向 殆なく、 秋の如し。行手に 甚億少にて、

米)に取着きしも、

風、激しく引返

時間程、

焚火して休憩。魚郎

水に歸着。

洗洞谷を經て、七時、尾根(千二百

ŋ

午前五時出後、兜案に向ふ。小馬

潔にて、美しきふとんを得て、皆一 上洞竒。淺野氏養蜂番小屋(人夫金 きらむ。午後五峰三十分。薄暮、前 キー使用不可を知り、 の家族、番をなす)に泊る。家屋清 此の登攀をあ 奉より出づる本流)の分岐點着。 午後一時、源水谷、机上峯谷(地圖 111 後四時保恩水に歸着。 にも、現地にも名を知り得ず、机上 3 を遡り、 川は凍りて、樏にて歩行し得。 机上巻登路を下見してを

出發を

郎川谷を見るも、雪多からず、スキ 水に向ふ。峠道を覆ふ雪は敷糎、上 最與の民家金氏方に泊る。 時、金谷洞通過、 れども、増さず、正午峠に塗し、魚 雪の憧をもち、午前七時出發、保恩 細嶺を越え、魚郎川谷にかすかなる 使用は断念せざるを得ず。 冠帽峯スキー登攀を断念し、 五時、保 炒水着、 午後二 北黄 悟一氣登頂に決し、晝食、十一時半 斷念、七時起床、風企ぎて晴天とな 出發、二時四十五分、二千百七十餘 五百米地點に着、歸途夜になるを覺 倒木の尾根をぬけて、午前十一時千 分岐點着。荒木の籔、雪(數十糎) ため午前丸時出發、十一時、源水谷 りしため再、机上米登路を下見の 午前三時頃、風强きため、

その北の尾根に取りつく。これまで 洞の一つ北の谷にあり)に出でて、 洞」小馬洗洞(地圖に谷なし、馬洗 尾根を二つ越え、「その間の谷は馬洗 とを主張するに、金、洞谷に入り、 ふ。地圖により、 金を登るまでの案内とし、兜縁に向 風出で、 草尾根に出でて、金を歸す。次第に に二時間半を費やす。疎林をぬけ、 三日 曇、少雪 午前七時出發、 山馬洗洞に入るこ

惡の爲引返す。 八百米、尾根の急峻にならむとする 黒木立のある點に着せしも、天候險 少雪ちらつく、十一時、千 小馬洗洞谷を魚郎川

> 午前七時三十分發、 夕陽に映ゆる冠峯美し。 河原の野天風呂に久振の垢を流す。 て、午後四時甫上洞に歸る。 休暇なきため、 六日

宅前。 氏に謝し、田邊少佐宅の歡迎の夕食 に列る。その厚志に送られて午後十 時の夜行に乗りて、 午前九時發、午後四時半に淺野氏 田邊少佐の出迎を受け、 歸途につく。

つく。 日 風のため金剛山登攀を斷念歸途に 金剛山登路の下見に出掛 九日 薄曇、强風 黑田等京城見物、 午後京城着。 晴、强風 だける。

半にて、平らなる頂上の端に出づ。 ぶ")を登り先日引返せし千八百米地 尾根の南尾根、兜峯南尾根と假に呼 兜案より、東走する二つの大きなる 洗洞谷を經て、その北の尾根へ即、 は、上の方蓼科山の如きゴーロの急 風、相當ありて、寒し、此の南尾根 る無峻なる尾根を登ること、一時間 點に十時着。雲、岩塊、疎林より 途は北尾根を探る。 なる尾根なり。一時、 午前六時出發、兜峯に向ふ。 **陸側の

雪斜面を** 成

> 書、朝鮮海峽渡 十一日 曇

七日 **場嶺登攀を斷念し** 北黄細嶺を越え

4

歸途に就く。 宿。城大山岳部員と歡談す。 は東京に直行。夕、溫井里溫泉に投 汽車待合の時間に元山見分。 嵯峨根は九州に 午後十時發 須賀

北鮮の全山を一眸に望む。三時發、 米の頃に着、快晴、白頭山を始め、

六時三十分、保恩水に歸着。

五日 晴、

りし方々に深く感謝の意を表す。 淺野氏の御親切を始め、御世話にな 十二日 鼓に田邊少佐の一方ならぬ御厚意 東京着 山陽道

## 白 行

點着。本流氷上を步きて四時半保恩 兜谷にはいり、三時、本流合流 途中傾斜の急に緩くなる點よ 倉小屋着七・一○、二股よりスキー を着ける。 朝松本着。四谷發午後二・三〇、 一九三四年一二月三一日。 一九三五年一月 Ho 猛 降

> ほれるデブリを見て退却す。一月三 馬尻往復。白馬大雪溪下部に於て数 道を造りなどす。一月二日。降雪。 澤は埋らず丸木橋を渡るに便なる様 馬尻午後一二・一〇、 好天氣なり。猿倉後午前五・四〇、 日。秋晴。氣溫高く正月には稀有の 日前に杓子側より落ちたるものと思 は殆ど見られず。馬尻に於ける新雪 猿倉歸着四・一七。 回畫食後二・〇〇發。馬尻三一〇〇 二・五〇、鞍部スキーデポにて第二 キーデポとす。白馬岳三角點午後 部小屋一一・五〇一一二・二〇、ス 馬尻七・二五、ネブカ平下晝食。鞍 五日朝東京着。 四谷間一寨二圓)。 O、自動車を呼びて四谷へ(二俣・ 猿倉發午前七・三〇、二股九・三 正三氏遭難せらる。一月四日。降雪 の量は約一尺二寸。京都山岳會吉岡 風强し。 猿倉發午前一○・○♀ 此日新雪の雲崩 夜松本發。 途中長ハシリ 月

あり。 の降雪にては降雪中にあらざれば雪 き深雪に遭遇したるのみ。此の程度 キー滑降は實に壯快を極め中頃稍 手袋の必要さへ感ぜず。 午後三時頃より尾根に雪煙を見たる 快晴にして頂上正午氣温零下一〇度 ンよく効きしも尾根の上は雪深き は西側は風の爲めクラストしアイゼ 扇の危険なきもの と思 はる。尾枳 らそれまでは風も殆どなく尾根にて 今冬猿倉側よりの初登頂。 長澤佳熊 大雪溪のス 三日は 重

# 斐駒ケ岳

拜啓去る一月十四日晴天に惠まれた

用 荒ぶ、十三日午後一時七丈小舎到着 積雪、屛風小舎一泊寒風物凄く吹き 山粉雪でラツセルに困難―二米程の 出發、笹平―約一米程の積雪、黒戸 駒城村横手前宮に、一泊翌朝未明に 甲斐駒ヶ岳登頂を述べます ルを行つた。同小舎泊り(舊小舎使 砂拂邊までスコップを持つてラッセ

その時間を示せば次の如くです。 好の天氣に恵まれ前日にラツセルし 駒ヶ岳頂上(一一、三五)小舎歸爵 七丈小舍(午前八、〇〇)御來光揚 た道を辿つて駒ヶ岳頂上を極めた、 十四日好晴、風も無く、雲もない絶 「午後一、〇〇)泊り、翌日吹雪の (八、三〇)鳥帽子岩(一〇、三五)

山頂の氣溫、零下九度五分で想像し ました。草々、 り、外は地獄谷方へ雪庇形成して居 から頂上まで尾白溪谷の方へ雪庇あ てゐたより暖かでした、駒ケ岳の肩 り、その怪登高が非常に樂だつた。 雪は前日の强風のためクラストとな

一、山岳二十九年三號報告、

黑田

早川

了承を乞ふ。編輯派

(寫眞二枚ありしも之は割愛せり御

**岡書基金に就てのお願ひ** 

深く感謝する所であります。 納めましたことは本會特に圖書係の 山岳圖書を購入し、各國山岳會誌及 び本邦登山團體の會報を合本整理す 本會の圖書基金が非常なる成績を 右の間書基金を以て妙からね和洋

ひ致したいと思ひます。 此の上とも會員諸氏の御後援をお願 **圖書室を尠くとも本邦に於いて最も** しむるにはまだく一多くの費用と時 完備せる山岳圖書館たらしむるため 間と勞力とを必要とします。本會の ることが出來たのであります。 然しながら岡書室の内容を充實せ

出

席

ります。 事に致しますが、この會報誌上を以 ました方々へは別に書狀を差上げる 據出をお願ひ致す次第であります。 て尙篤志の會員諸氏に圖書基金の御 昭和十年二月 從來圖書基金の御出捐を願ってゐ 追而御申込の形式は左の通りであ

中を歸甲しました。

昭和十年度圖書基金何口何圓也 日本山岳會圖書基金申込書 (但し一口年額金五圓) 名

;

日本山岳會御中 右申込候

日御拂込下さつても結構で御座いま 御申込書文けを先きに頂戴して後

の會員名簿も揃つて居りません。會

としても保存の必要を認めます。會

す。

书 二月七日定例理事會 高頭、小鳥、冠、橇、藤 務 報

一、書架增設 一、次回小集會 一、山日記報告 一、終身食員優待ノ件 一、三十周年記年事業、松方、藤島 一、圖書基金ノ件、松方 一、山岳バックナンバー委任保管 黑川、角川(囑託) 磯野、森田、逸見、額田、 飯塚、別宮、田口、櫻井、 鳥、松方、三三、鳥山、 角田

許に残るものは催かです。殆めから ます。會の事務所は創立以來轉々と して居ましたので、かくる資料の手 十年の歴史資料の蒐集を始めて居り 一、大平氏銅像建設に就いて山岳倉 一、十年度山岳編輯ノ件、松方 日本山岳會三十年を記念して、三 より寄附ノ件、小鳥 山岳命資料について

> 所を。(山岳編輯係) 譲り下さいませんか。なるべく古い 員諸兄で古い名簿を御持ちの方は御

昭和一年一月中

(九三)

東京市 青森縣 大阪府 愛知縣 河合 松浦 大島 良成 景三 重義

(11011)

二二七八 ○三五二

仙邊市北六番町第二高校山岳部 代 表者變更

														_																-	_		3-	- 8
寫眞月報 同 小西六本店	ケルン 同 同	山小屋、一、二月號 朋 文 堂	東京鐵道局スキー山岳部年報	一九三五版 隆 章 閣	長田進著 全日本スキー地案内	第三高等學校山岳部	ける俵一郎馬嶋信之兩君遭無報告	鹿鳥槍に於ける内藤況二君御岳に於	研究 篠井金吾氏	上高地及其附近山岳に於ける醫學的	屛風岩遭難報告 谷口元治氏	山 上 十二月號 奈良山岳會	鮮山岳	新着圖書	開聞島 六號 佐多岬 一面	十六號 野間岳 一面	十四號 羽島 一面	鹿兒島 八號 垂水 一面	延 岡 六號 富高 一面	大 分 十一號 竹田 一面	五萬分ノー地形圖修正	陸地測量部出版地圖目錄	本會は兹に謹而哀悼の意を表す。	二月七日附通知を接手せり。	昭和九年二月逝去せられたる趣本年	四)	(明治三九年四月入會會員章番號六	京郡市 創期會員 宍戶一郎氏	會員計報	代表者 小松原鐵太郎	11111	銅所體育會山岳部	栃木縣日光町清瀧、古河電氣日光精	九六五 代表者 市原 哲治
山人會月報	がくれい 食報 同	アツタスキークラブ報 同	服部時計店登仙會報 同	白桦會報	魚市場山岳會報 同	臺灣山岳樂報 一月號	日本登高會報 同	明峯山岳會報 同	廣島山岳會報 同	步溪流會報	OTMスキー俱樂部何報、三、四號	せふり 同 福岡山の會	同 八王子山	獨 立 樹 一月號東京山族俱樂部	山 旅 同 神戸山旅俱樂部	アルカウ趣味同 日本アルカウ會	同關西徒步	同獎儉合		同	木立 同 關	1th	關東旅行俱樂部	路一、二月號	旅 同 東京アルカウ會	東京旅行俱樂部	旅 行 一、二月號	ジャパン・ツーリスト・ビューロー	ツーリストー、二月號	中山峽水 同 山梨景勝地協會	地學雜誌 同 東京地學協會	山一月號	野鳥同称書房	登山とスキー同 黎 明 社
1935	Natural History Dec. 1934 Jan.	1934 Feb. 1935	Mountaineering Journal Dec.	Club Journal Nov. 1934	The Scottish Mountaineering	Revue Alpine de Trim. 1934	ing Dec. 1934	Svenska Turistforeningens Tidn-	OctDec. 1934	Unione Ligure Escursionisti	Leto 1934	Planinski Vestnik Stev. 11-12	1934	Club Alpino Ita'iano OctNov.	Mars-Juin 1934	Bulletin du Club Alpin Belge	1935	Die Alpen Now-Dec. 1934 Jan.	La Montagne OctDec. 1934	Jan. 1935	The Mountaineer Dec. 1934	Appalachia Dec. 1934 Jan. 193	1934 Jan. 1935	The Prairie Club Bulletin Dec.	1934	Sierra Club Bulletin Octdec.	195	Trail and Timberline No. 193-	1934	The Geographical Journal Nov.	Nov. 1934	The Alpine Journal No. 249	京都山岳會報同	大阪ミテコー會報 一月號
「山岳」合本用表紙  1. 上質ベックラム(灰青色) 2. 背、山岳第何年西暦を押す. 3. ピラは兩面に含章を押す. 4. 前後見返し茨木畫伯筆. 5. 一年分合本用表紙のみを所要の場合、五十銭(送料本含負擔) 6. 雜誌を本會へ送付され製本料共一圓(返送料本含負擔)												THE THOUSENING	Filmen im Hochrahirma	K Weiss: -Fotografiaron and	Dr. J. Kugy:-Alpine Pilgrimage		S Spencer: -Mountaineering		F. S. Smythe: -An Alpin:	購入圖書	以上 吉永虎馬氏	高知林友 一七四號		小長白山脈寫眞帳		1914	Exploration in The Selkirks	H. Palmer'-Mountaineering and	會員寄贈圖書	de Catalunya Sept-Nov. 1934	Butlleti del Centre Excursionista	1933 bis 31 Okt. 1954	Jahresbericht 29. Vom 1 Nov.	
<ul><li>會報綴込用表紙</li><li>1. ピラは濃緑色レザー、會章押捺</li><li>2. 背は濃紺色クロース。</li><li>3. 代金四十銭(送料本會負擔)</li><li>御入川の方は振替又は小為替に</li></ul>								1	年 四公	廣告一手取受 進 国	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	デ (不ご居び	東京市芝區等	尚者 逸 見	<b>秦</b> 行者額	昭和十年二月二十八日陵厅																		

刷印所刷印木多

て御串越下さい. 振替口座東京四八二九番